

西田小の研究

1 研究テーマ

「確かな学力」を身に付けさせる学習指導

～子どもが主体的に読みに関わる授業及び環境づくり～

2 研究テーマ設定の理由

子ども一人一人に「生きる力」を育むためには「確かな学力」を身に付けさせることが不可欠である。そこで、当校の子どもの実態やこれまでの研究実践等を踏まえ、研究テーマを下記のように設定した。

子どもの実態から

- 漢字力や計算力などの基礎・基本の確実な定着を図る学習指導の必要性
- 既習事項を生かしながら自分の思いや考えなどを豊かに表現することができる子どもを育てる必要性
- 学校と家庭が連携を図りながら学習習慣を身につけさせる必要性

これまでの研究実践から

- 子どもの学ぶ意欲を大切にした学習指導の充実を図る必要性
- 子どもが自分なりの課題を主体的に解決していくことができる学習指導を充実する必要性
- 指導と評価の一体化を目指した授業改善の必要性

「確かな学力」を身に付けさせる学習指導

～子どもが主体的に読みに関わる授業及び環境づくり～

教育行政の重点から

- 心の教育の充実を図る必要性
- 基礎的・基本的な内容の確実な定着を図る学習指導を充実する必要性
- 特色ある学校づくりを推進する必要性
- 情報教育の充実を図る必要性
- 体力の向上を目指した教育活動の充実を図る必要性

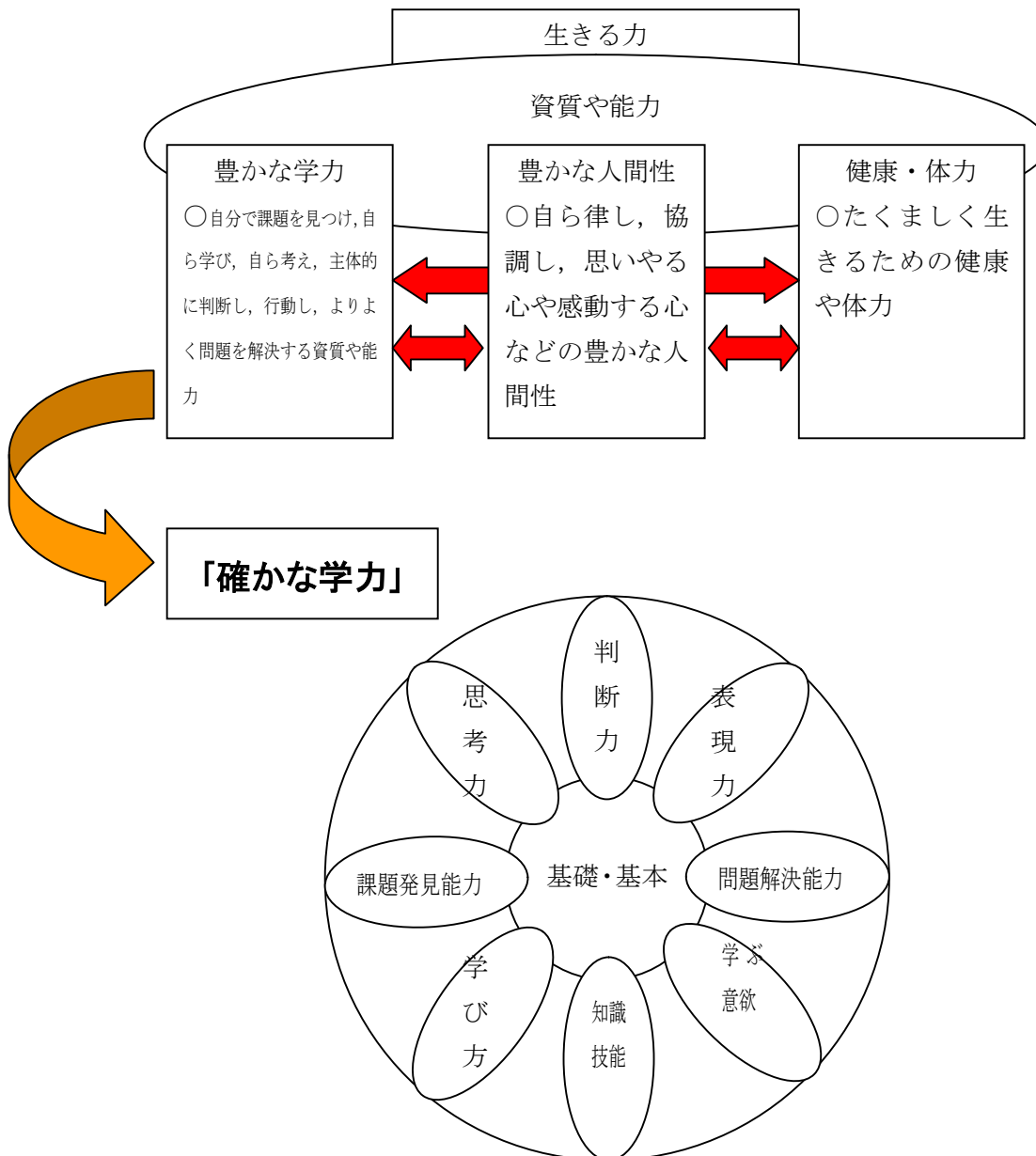
今日的な教育の動向から

- 基礎・基本の徹底を図る必要性
- 個に応じた指導の充実を図る必要性
- 豊かな人間性とたくましく生きるための健康や体力を育むための教育を充実する必要性
- 総合的な学習の時間の充実を図る必要性

3 研究テーマについて

(1) 「確かな学力」とは

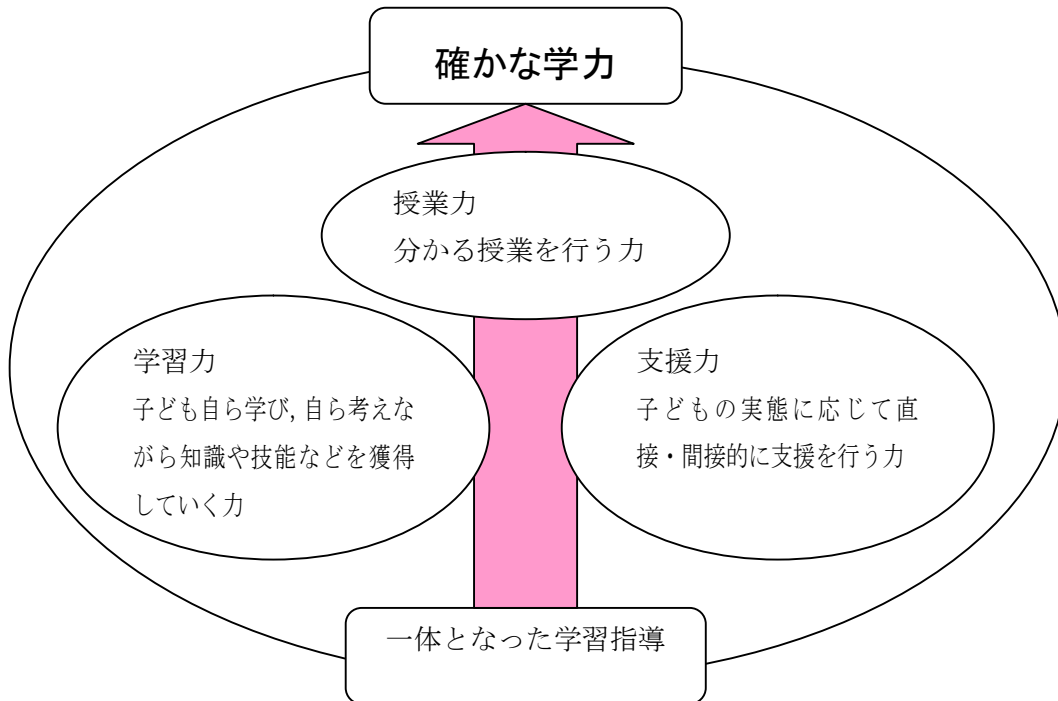
「確かな学力」は、基礎的・基本的な知識や技能だけでなく、学ぶ意欲、思考力、判断力、表現力、問題解決能力などまでを含めた学力である。今日の教育に求められているのは、子どもたちに、基礎的・基本的な内容を確実に身に付けさせ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題解決する資質や能力、自ら律しつつ、他人とともに協調し、他人を思いやる心や感動する心などの豊かな人間性、たくましく生きるための健康や体力などの「生きる力」を育むことである。「確かな学力」は「生きる力」の基盤の一つであり、本研究テーマを追求することによって子ども一人一人に「生きる力」を育むことができると考える。



(2) 「確かな学力」を身に付けさせる学習指導とは

教育課程はまさに基礎的・基本的な教育内容を系統的・発展的に編成してある。また、年間指導計画は、教育課程に基づき、各単元の指導の目標やねらい、教材、学習活動、学習形態、指導体制、評価計画などが具体的に示されている。日々の学習指導は、これらに基づき子どもの実態や学習状況に応じながら、創

意工夫を加えて実施される。このように、教育課程に基づき、年間指導計画に即して、教師の分かる授業を行う力（授業力）や子どもが自ら学び、自ら考えながら知識や技能などを獲得していく力（学習力）、子どもの実態に応じて直接・間接的に支援を行う力（支援力）が一体となった学習指導を地道に積み上げることによって子ども一人一人に「確かな学力」を身に付けさせることができると考える。



(3) 読みの指導について

昨年度までの研究を通して次のような課題が浮かび上がってきた。

国語は「確かな学力」の主要教科であり、読む力が全ての教科につながるので、引き続き国語の研究を進める必要がある。

昨年度までの研究を実践し、その評価をもとに更に改善を図る必要がある。

これらの課題から、「確かな学力」を身に付けさせていくためには、国語科の「読むこと」の指導の充実を引き続き図ることが必要であると考え。そこで、本年度は今までの研究の実践化を図り、具体的に取り組むこととし、サブテーマに「子どもが主体的に読みに関わる授業及び環境づくり」を掲げ、研究を進めることにした。

学習指導要領では、国語科の最も基本的な目標である国語による表現力と理解力とを育成するとともに、互いの立場や考えを尊重しながら言葉で伝え合う能力の育成を重視して、新たに「伝え合う力を高める」ことを目標に位置づけている。また、新学習指導要領では、「言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、児童の言語活動を充実させること」に配慮するよう示されている。このことから「読むこと」の特性を生かしながら児童主体の言語活動を活発にし、言語の教育としての国語科の目標を実現する必要がある。

本校は、平成18年度から国語科を研究教科に取り上げ、「国語科における読みの指導」をサブテーマとして研究に取り組んできた。授業における指導法・家庭での学習への取り組み方・校内の学習環境整備を

大きな柱として研究を積み上げてきた。本年度から取り組んでいる「子どもが主体的に読みに関わる授業及び環境づくり」の研究では、これまで積み上げてきた研究をもとに計画し、実践・評価・改善の中でさらに充実した取り組みをしていくこととした。

4 研究の視点

子ども一人一人に、「確かな学力」を身に付けさせるためには、授業力や学習力、支援力が一体となった学習指導を展開することが重要であると考え。そこで、3つの視点について研究し、実践化を進めていく。

〈視点1〉

教材を正確に読み取るための指導方法を工夫すれば、読みの力がつくのではないか。

研究内容

- ・ P I S A型読解力の育成を目指した授業実践
- ・ 参観の視点を明確にし、全学年の授業に生かせる研究授業の実践
- ・ 本校の「身につけさせたい読みの力」に関する資料の提供と授業での実践

〈視点2〉

家庭での国語の学習の仕方が分かれば、子ども自ら国語学習に取り組み、読みの力を身につけることができるのではないか。

研究内容

- ・ 家庭学習の手引きの改善と活用
- ・ 読みの力を高める家庭学習の在り方
- ・ 音読カードを活用した音読活動の実践

〈視点3〉

学校内の学習環境を整備すれば、学習活動全体において読みの力を育成できるのではないか。

研究内容

- ・ 発達段階に応じた学習のしつけ表の作成・活用
- ・ 学校内外の学習環境の整備（設営，朝の活動，学級文庫，図書館利用，漢字学習）
- ・ 教科書教材に関連した図書を収集し、子どもの読書活動を広げる工夫。

5 研究計画

各研究部の昨年度までの取り組みを基に研究を進め、計画・実践・評価・改善の流れで実践計画を立てる。研究は3年計画で行い、21年度は昨年度の研究を実践し、22年度は実践を評価・改善しながらこれまでのまとめを行う。

年度	21年度（一年次）	22年度（二年次）	23年度（三年次）
研究	計画 → 実践 →	評価・改善 → 実践 →	評価・改善・実践 → まとめ

各年度の研究内容

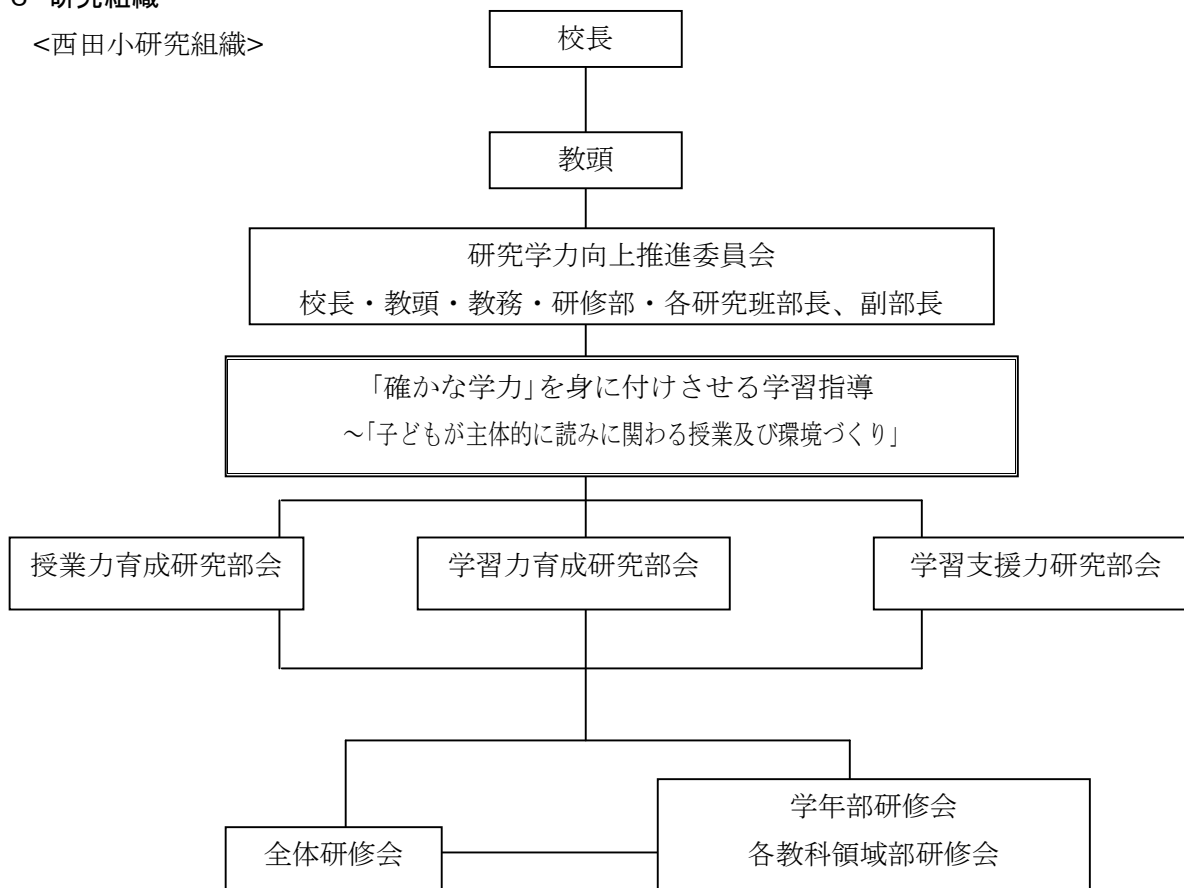
(1) 平成 20 年度 (一年次)			
部	授業力研究部会	学習力研究部会	支援力研究部会
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 指導方法を工夫した研究授業での検証 ・ 資料提供及び活用の推進 ・ 学力検査の分析を生かした授業作りの推進 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「家庭学習の手引き」の内容の改善 ・ 音読カードの作成及び活用 ・ 各手引きの整理と管理 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学習のしつへの改善 (チェック表等の見直し) ・ 学習環境の整備 (教室の学習環境)

(2) 平成 21 年度 (二年次案)			
部	授業力研究部会	学習力研究部会	支援力研究部会
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 国語科における P I S A 型読解力の理論研究及び授業実践 (物語的教材) ・ 学力検査の結果を生かした授業の展開 ・ 授業を通した研究の検証 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 手引きの活用とその効果についての調査 ・ 手引きの内容について検討と改善 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「チェック表」や「声のもののさし」の活用 ・ 漢字学習用教材の開発 ・ 辞書辞典の設置

(3) 平成 22 年度 (三年次案)			
部	授業力研究部会	学習力研究部会	支援力研究部会
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・ 国語科における P I S A 型読解力の理論研究及び授業実践 (説明的教材) ・ 授業を通した研究の検証 ・ P I S A 型発問集の作成 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 手引きの活用とその効果についての調査 ・ 手引きの内容について検討と改善 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「チェック表」や「声のもののさし」の活用 ・ 辞書辞典の設置 ・ 授業で扱う教材の関連図書の収集と活用

6 研究組織

<西田小研究組織>



研究授業に向けての取り組み

1 研究の視点

教材を正確に読み取るための指導方法を工夫すれば、読みの力がつくのではないか。

2 研究の内容

上記の視点である「正確に読み取る」ために、本年度はPISA型読解力に焦点をあて、特に「文学教材」を中心に以下6つの柱を立て研究を深めていくことにした。

(1) PISA型読解力の理論研究及び授業実践

ア PISA型読解力の定義

自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキストを理解し、利用し、熟考する能力

つまり、単に文章を読解するだけでなく、それを基にして考える、そして社会に参加する。そのために求められる力として位置づけている。

イ 読解力の観点

- ① 情報の取り出し ～ 書かれていることを取り上げること。
- ② テキストの解釈 ～ 書かれた情報から推論して、意味を理解すること。
- ③ 熟考・評価 ～ 書かれた情報を自らの知識や経験に位置づけること。

ウ 国語科におけるPISA型読解力

- ① PISA型で正確に読み取るということは
読んだことを根拠にすること
- ② 情報の取り出しとは
本文中に書いてある情報を正確に取り出す、つまりこれまでの国語での読解のこと
- ③ 解釈とは
何が書いてあるのか考えること、つまり推論すること。ただし「本文中に書いてあること」を推論の根拠にさせる。
- ④ 熟考・評価とは
文章をよく読んで、自分の体験や知識と結びつけて、自分の意見を述べること。つまり自分だけの意見をもつこと。ただし「本文中に書いてあること」を意見の根拠にさせる。そして、このような意見をもつためには「クリティカルリーディング」の育成が必要である。

エ 視点を検証するための研究授業

オ 検証授業を受けた授業実践記録

検証授業を日々の授業に生かすため、各学年の「説明的教材」の授業において、PISA型読解力を深める発問を具体的に考え、実践し子どもの反応を記録していく。

カ PISA型発問集の作成

上記の授業実践をまとめ、PISA型発問集を作成する。

3 目指す子ども像（説明的文章編）

① PISA型の「解釈」における目指す子ども像

1・2年

時間や事柄の順序などを考えながら本文の大体を読み取ったうえで、内容や筆者の意図を考えることができる子ども。

3・4年

中心となる語や文をとらえて段落相互の関係や事実と意見との関係を考えてうえで、内容や筆者の意図を考えることができる子ども

5・6年

要旨をとらえたり事実と感想、意見などとの関係を押さえたうえで、自分の考えを明確にしたりしたうえで、内容や筆者の意図を考えることができる子ども

② 「熟考・評価」における目指す子ども像

1・2年

内容について理解したうえで、自分なりの思いや考えを表現できる子ども。

3・4年

内容について理解したうえで、自分なりの思いや考えを表現し、一人一人の感じ方に違いがあることに気づく子ども。

5・6年

内容について理解したうえで、自分なりの思いや考えを表現し、考えを広げたり深めたりすることができる子ども。

4 研究の実際

(1) 研究授業の視点

PISA型読解力の観点を意識した発問を工夫すれば、教材を深く読みとったり、自分の意見や考えを表現したりすることができるのではないか。

○ 情報の取り出し、解釈を深める検証授業

6月22日 3学年「アリの行列」

指導者 渡邊 英志

3 学年国語科学習指導案

平成 22 年 6 月 28 日 (月) 5 校時
3 年 1 組 男子 18 人 女子 14 名 計 32 名
指導者 1 組担任 渡 邊 英 志

1 単元名 まとまりに気をつけて読もう (教材名「ありの行列」 光村図書 上)

2 本時 (6/8)

- (1) 目 標 ○ 第 9・10 段落からありの行列ができるわけを読み取ることができる。
(2) 評価基準 ○ 第 9 段落・第 10 段落からありの行列ができるわけを読み取ることができたか。
(3) 指導上の留意点

「つかむ」段階では、まず 8 段落までを、はたらきありがどのようにして巣に帰ってゆくかを指示語や接続語に注意しながら音読させ、これまでのウイルソンの実験や観察の結果を読み取らせる。

次に「見通す」段階では、めあてを読んだり、書いたりすることで、「なぜ、ありの行列ができるのか」という本時の学習内容に見通しを持たせたい。

「調べる」段階では、9 の段落を読んで、グループごとに要点を話し合わせ、ありの行列ができるわけについて気付かせ、まとめさせたい。その上で、「このように」という接続詞がどの段落と結びついているのかを考えさせて、8 の段落と関連していることに気付かせたい。

さらに「においをたどって、えさのところへ行く」「においをたどって巣に帰る」のはウイルソンのどの実験からわかるのかをつかませたい。(研究の視点である PISA 型発問による情報の取り出し)

そして、9 段落が 1 の段落の「問い」に対しての「答え」となっていることにも気付かせたい。

さらに、10 の段落は、その「答え」からさらにわかったことはどんなことかを考えさせたい。その際も「それで」の接続語に注目させながら、考えさせていきたい。

「深める」段階では、ちがう種類のありの道しるべが交わっている絵のワークシート (非連続型テキスト) を使って、ありがまよわずに巣に帰る理由についてグループで話し合わせることで、なぜそうなるのかについてお互いの考えを出し合い、まとめることで 10 の段落の内容を確かめさせたい。(研究の視点である PISA 型発問の解釈)

最後に「広げる」段階では、本時の学習を通して子どもたちが、「なぜ、ありの行列ができるのか」というウイルソンの実験や観察にどんな感想を持ったかを発表させることで、ウイルソンの研究に対する子どもたちの感動を共有させたい。

次時の学習では、段落の要点を整理して本文全体の文章の構成について考えてみることを確認して、次時の学習の意欲を高められるようにしたい。

過程	主な学習活動	時間	教師の支援・指導上の留意点
つかむ	<p>1 前時の学習を想起する。</p> <ul style="list-style-type: none"> 全員で8段落までを音読する。 	5	<ul style="list-style-type: none"> ○ 指示語や接続語に注意しながら音読させる。 ○ ウイルソンはどんな観察や実験を行ったか確認する。
見通す	<p>2 全員で9・10の段落を音読する。3 めあてを確認する。</p> <div style="border: 2px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>9・10の段落から、なぜ、ありの行列ができるのかその理由を考えて</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ● ワークシートにめあてを書く。 	3	<ul style="list-style-type: none"> ○ 本時の内容を音読させる。 ○ めあてを読んだり、書いたりして本時の見通しを持たせる。
調べる	<p>4 9の段落を読んで、ありの行列ができるわけについてグループで考える。</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> <p>・においをたどって、えさのところへ行ったり、巣に帰ったりするので、ありの行列ができる。</p> </div> <ul style="list-style-type: none"> ● 「このように」とは、どの段落をさしているのだろう。 ● 「においをたどって、えさのところへ行ったり」「においをたどって巣に帰ったりする」のはウイルソンのどの実験や観察からわかるのかな。 <p>・はたらきありはえさを見つけると、道しるべとして、地面にえさをつけながら帰る。</p> <p>・他のはたらきありたちは、そのにおいこそって歩く。</p> <p>そのはたらきありたちは、えさを持って帰るときにえきを地面につけながら歩く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ● なぜ、ありは迷わずに巣に帰れるのかグループで話し合う。 <ul style="list-style-type: none"> ・においをたどるから ● グループごとに話し合ったことを発表する。 <ul style="list-style-type: none"> ・においをたどって、えさのところへ行ったり、巣に帰ったりするから、ありの行列ができる。 	<p>7</p> <p>7</p> <p>8</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ グループごとに話し合っ意見をもとめ、発表させる。 ○ 8の段落と9の段落は、つながりがあることに気付かせる。 ○ ありの行列ができる理由はウイルソンのどの実験や観察からわかったのか確認させる。 (PISA型～情報の取り出し) ○ 「えさをたどるとき」「巣に帰るとき」にありはどうして迷わないで行けるのかその理由を9段落から見つけさせる。 ○ 1の段落の「問い」に対して9の段落は「答え」になっていることに気付かせる。

支援すべきかわかった。

- ・ 国語の単元で扱う教材に関連する本を図書室から多数貸し出してもらったことにより、子どもたちの読書意欲が高まり、読書の幅も広がった。

(2) 課題

- ・ 「説明的教材」におけるPISA型発問を考えることが難しく、研修を積む必要を感じた。
- ・ 解釈の際、まだまだ、根拠を本文から探してくることができない児童もいる。必ず本文に即して考えるようにしたい。
- ・ 今後は「熟考・評価」についての発問を考える必要がある。